

パートナー環境フォト選評・交流会を開催しました！

去る3月28日（土）に、イベント・記録グループ主催によるパートナー環境フォト選評・交流会、センター企画・交流課によるH21パートナー活動懇談会が行われました。

この環境フォト選評会は、イベント・記録グループ初めての自主活動として企画されたもので、センター企画・交流課の協力のもとで開催されました。初めての企画にも関わらず、パートナー、センター職員、霞ヶ浦問題協議会事務員合わせて総勢29名もの方が参加されました。

出来るだけ多くのパートナーに気軽に応募してもらえるように、フォトコンテストのテーマは「環境に関するもの」と広く設定したところ、パートナー16人から31作品の応募があり、芸術的なものからスナップ的なものまで幅広い範囲の写真が集まりました。また、選評会では参加者全員による投票が行われ、最優秀賞：尾形孝彦さん、優秀賞：平江俊之さん、アイデア賞：吉村喜男さん、ユーモア賞：栗原知彦さんと決めました。なお、入賞した作品を含む全ての応募作品が、3月28日（土）よりセンター1F展示交流広場で展示されていますので、ぜひ見ていただければと思います。

干前中の選評会の後には、イベント・記録グループとセンター職員で作った豚汁を食べながらの昼食会が行われ、写真の講評を話題に大いに盛り上がりました。また、午後からのセンター企画・交流課によるH21パートナー活動懇談会では、2～3月に行われた各グループのH21活動計画打合せの結果が報告されるとともに、パートナー活動全体をさらに活性化させていくためビジョンとして「企画・広報委員会構想」が提示されました。

今年度も、イベント・記録グループの企画による、グループの垣根を越えた交流の場が作れればと思います。

イベント・記録グループ

（最優秀賞）

受賞者：尾形 孝彦さん
題 名：芦の悲鳴



幼き日に親しんだ湖岸の景色が一変してしまった。護岸工事で行き場を失った動植物たちの心の悲鳴が聞こえてくるようでシャッターを切りました。

（優秀賞）

受賞者：平江 俊之さん
題 名：常陸利根川



（アイデア賞）

受賞者：吉村 喜男さん 題名：不思議な羽衣？

パートナー
環境フォト2008
入選作品



（ユーモア賞）

受賞者：栗原 知彦さん 題名：誰か交替してくれないか

ヨシの悲鳴

もう三十数年前になりますが、霞ヶ浦は私にとってお金のかからない遊び場でした。春から初夏は釣り、夏は泳ぎや舟遊びにと自然を満喫していました。

当時の湖岸状況を振り返ると、堤防から水辺に行くのには身体が隠れてしまうほど一面に広がるヨシ原の

草いきれの中を横切っていくのですが、巣ごもりをしていたヨシキリが一斉に鳴き出し、羽ばたきをして飛び立ちます。それは植物や鳥類、魚類にとって、また人間生活においても豊かさを象徴する自然環境だった気がします。水辺に出ると黄色のアサザが湖面を覆い、水の中では沈水植物の藻が揺れているのが良く見えました。

パートナー活動の一環で植物や魚類の定点観測を行っていますが、残念なことに当時の面影を見ることはできません。そこには波に根洗いされ倒壊したヨシや、根をむき出しにされ今にも倒れそうなヨシの姿がいたるところで見られ胸が痛みます。

あの豊かな自然はどこへ行ってしまったのでしょうか。残念ながらこれが現実です。それは、霞ヶ浦流域における様々な歴史の中で人間生活の変化とともに失われてしまったのではないかと思います。

このほどイベント・記録グループの自主企画である環境フォトコンテストに応募しました。私はすぐ、上述しましたヨシの悲しい姿をリアルに切り取ることをテーマに考え、撮影イメージは風雨の中激しい波に身動きできず、コンクリート護岸と波にサンドイッチされ、逃げ場のないヨシが発する悲鳴を聴く事としました。それは、雨風と波でずぶ濡れになり、寒さに耐えながらの撮影でした。穏やかな霞ヶ浦はなにものをも包み込む優しさを見せますが、ひとたび天候が一変すると荒々しく牙をむき出しにする姿を目のあたりにし、その激しさを痛切に感じました。

私は、研修グループ活動で「水を調べてみよう」の環境学習を子供達と一緒に学んでおりますが、その中で自然環境保護の大切さをあらためて痛感するとともに子供たちを通じて、あの豊かだった自然環境に少しでも近づけられるような、将来につながる活動を進めて行けたらと願っております。

(尾形)

「エコ農業クラブ」活動の休止

「エコ農業クラブ」活動のフィールドとして利用していたセンター正門前の畑が、今年に入って何の連絡も無く突然“遺跡調査”のための掘削が始まった。

もともとこの土地は、旧霞ヶ浦町（現かすみがうら市）がセンター開設に合わせて町中心部からの町道新設予定地として一部買収したが、その後の町村合併等により手つかずのまま放置され、大人の背丈を超すセイタカアワダチソウなど雑草が繁茂し荒れ果てていた。しかし市役所には管理（草刈）の予定はなく、正門前の荒地の存在はセンターの環境管理の上からも苦慮していた。この対策として市役所の口頭了解を得て、パートナーの自主活動として“グループ営農を通して畑作農業”が実施できないかとの要望が出された。

このため、第二期パートナー活動の開始に併せてパートナーの有志19名の参加を得て自主活動組織「エコ農業クラブ」を立上げ営農活動に入った。まずは圃場の整理のうえ、会員持ち寄りの種子・苗での、さつま芋、カボチャ、キュウリ、トウモロコシ、ニガウリ、オクラ、大根、秋どりジャガイモ等雑多な作物が植えつけられた。収穫物はパートナー交換会や収穫祭に活用したほか、センター・ホールに展示し来館者や職員らに持ち帰り提供した。

二年目は作付作物を、サツマ芋、ジャガイモ、大根に絞り作付したが、収穫物の処理をめぐりセンターの協力を得られず収穫物の大半を廃棄処分せざるを得なくなったため、次年度からの再生産に経済的課題を残す結果となった。

このような状況のもと、3月15日会員が集まり「今後の活動の在り方」について相談をした結果、現フィールドでの活動継続は不可能との判断から「活動の休止」とすることとした。

最後に、これまで当クラブ活動にご理解とご協力をいただいた方々、特に、トラクターを気持よくお貸しいただいたセンター・交流サロン職員の戸井さんには心より御礼申し上げて筆を置きます。

(有吉)



カタクリの花

雪どけの始まるころ、明るい雑木林に赤紫色を帯びたカタクリの新芽が枯葉を突き抜けて顔を出す。

落葉のふとんをはねのけて開花するカタクリはじつと冬を耐えた山が始動する“春告げ花”として里山を歩く人たちから愛されている。

天気がよい日には花びらを大きく反り返らせて開くが、夕方になると閉じる。曇っていたり、寒い日には半開き、さらに雨の日は花びらは下向きのまま開かない

カタクリは花をつけるまでに7～8年かかるがその翌年

から花を咲かせ、種子をつくって生き続けて寿命は15から20年といわれる。

花は時期が来れば毎年必ず咲く。これから野山はカタクリに限らず色々な花が次々に咲き誇る。身近な花々の表情から四季折々の趣を感じ取ることができる。

野山を歩き、自然を見つめることで自然を愛し、それが環境への関心へと繋がってゆくものと思います。爽やかな季節になりました。外に出て、自然の中を歩きましょう。

(安 川)

庭づくり

20数年前に購入した当時の土地は海砂で更地化されていて、「潮干狩りに行くならば平江さんの庭に行けばよい。」と近所の人に冗談交じりによく言われたものだ。そんなやせた土地だから最初に花や苗木を植える時には、周囲に腐葉土や黒土などを入れて、土壌の改良からはじめた。花・木を増やすたびにこのような作業を繰り返してってきた。

植えた後のメンテナンスは、はなく、よく言えば自然流でいい。できる限り自然の生長に分らないが、それでも白樺に来てくれたと感激したことをしかし、後で知ったことだ。灰や砂地に強く、他の樹がで、生長が早く、日常の手入我が家の庭に一番適していた。今や家木となった白樺の木力強く芽吹くすがたを見て、



日々の忙しさにこじつけてあまりいいほうで殺虫剤や除草剤などを散布したことは殆どなまかせてきた。これまでどれだけ枯らしたかの木は無事に根付き、こんな土地に良く根付覚えている。

が、白樺は、土壌条件の悪い水はけのよい火育ちにくいところに育つパイオニアの代表格れもいらず自然に育てることが良いようで、木だったのかもしれない。

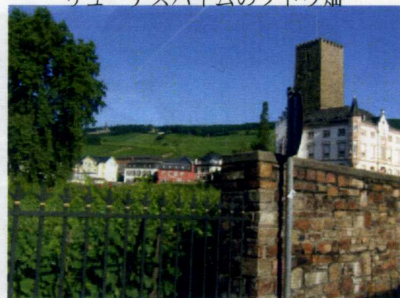
が、今年も天に向かって伸び伸びと育って、私達にエネルギーを与えてくれる。

(平 江)

ヨーロッパ紀行 ドイツ編

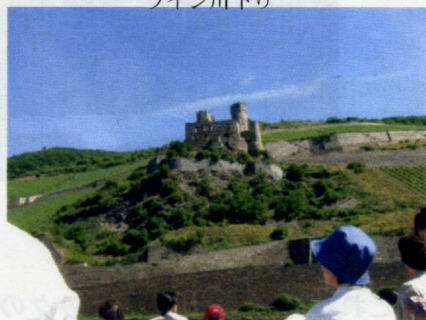
08年6月25日午前11時30分成田発全日空機でフランクフルトに向け出発した、旅の最初の宿泊地は、フランクフルト空港からバスで1時間30分程のライン川第一の景勝地といわれるリュースハイムであった。ここはライン・ワインの中心産地で、つぐみ横町とよばれる狭い坂道にはワインセラーが軒を連ね、にぎわいを見せている。

リュースハイムのブドウ畑



翌日、リュースハイムからキャンプ・ポンフェンまで約2時間のライン川下りを楽しんだ。ライン川は遠くスイスの山奥に源を発してドイツからオランダに流れ、ロッテルダムから北海にそそぐ国際河川である。約700kmがドイツ国内を流れ、兩岸の赤い屋根の家々とブドウ畑が川と古城にマッチした美しい景観は、自然と農業と経済が人々と調和して現在を営んでおり、河川浄化と合せて環境保全に国と国民が一丸となっている姿をかいま見た思いがした。

ライン川下り



ドイツ観光を語る時日本同様、種々の街道も又話題になると思う。遠く中世へ、もっと遠くローマ時代にまで思いをめぐらすことのできる道筋は現在も脈々と生きつづけており、ロマンチック街道もその一つである。

ドイツにおける旅の3日目は、街道の北では中世の面影を残すローテンブルクやデインケルスピュールなどを、南ではアルプスに連なる山並みが姿を現し、自然が深くなっていく、ロマンチック街道を国境の町フュッセンまで旅した。途中小高い丘陵がつづきその上の古城や、緑の牧場が

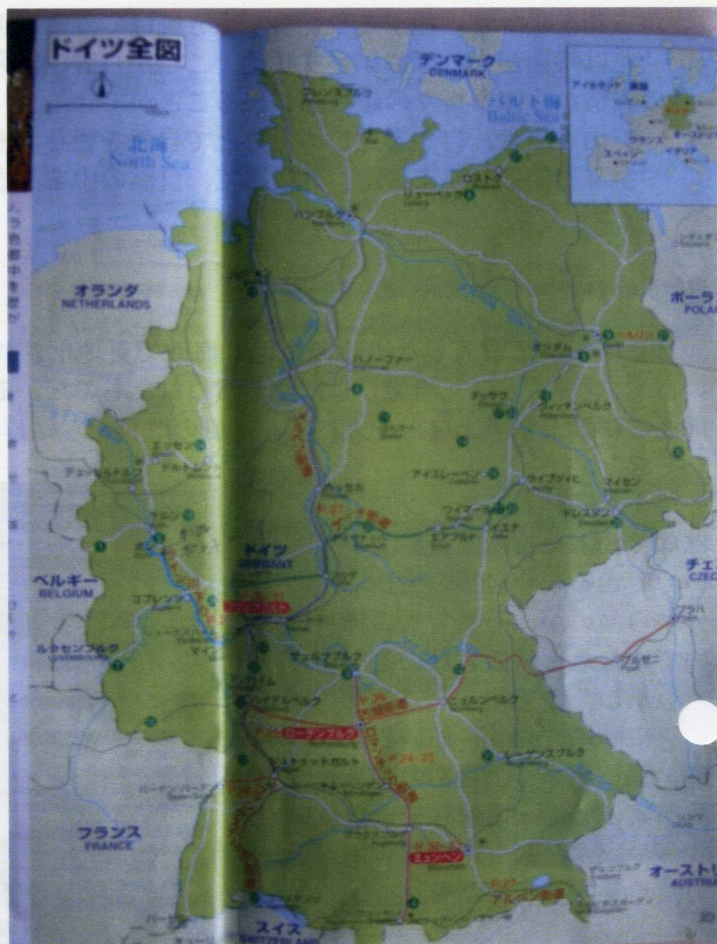
ノイシュバンシュタイン城



連なる風景は、喧騒とは無縁の牧歌的なたたずまいであり、過ぎ去る町々の家々では窓辺に色とりどりの花々を植え付けて観光客へも心遣いをしている様に感じられた。

フッセンは南ドイツ最後の町で、近づくにつれて雪を頂くドイツ・オーストリアアルプスの峰々を望むことができる。この町には「おとぎの国の城」を彷彿とさせる有名なノイシュバンシュタイン城が緑の丘の上に白亜の姿で観光客を引きつけている。

なお、ドイツでの飲み物は北部は黒ビールに代表されるビール、南部はワインでいずれも水よりも値段が安く、水は貴重品である。（浅野）



【パートナー香澄】の原稿を募集しています。

原稿はパートナー室のボックスにお入れください。

次回の締め切りは6月末日です。

内容自由。写真歓迎です。

【編集後記】

これからの季節、軽トラックの荷台には必ずと言っていいほど噴霧器が積まれています。田圃のあぜ道や用水路ののり面に、嫌になるほど無造作にそして驚くほど大量に除草剤が散布されます。

胡散霧消という言葉があります。消えてなくなる。つまり有であったものが無に帰する、という意味だと解釈していいでしょう。田畑にまかれる農薬は長い間には、胡散霧消する、と多くのお百姓さんは信じています。あるいはその振りをしています。

南極海に生息するオットセイの臓器から高濃度の農薬が検出された、というニュースにびっくりしたのは、もう20数年も前のことです。（H.I）

編集委員

尾形	孝彦
浅野	明宏
有吉	潔
大島	寿夫
栗原	知彦
平江	俊之
安川	敏行
稲葉	寛